

武蔵野日曜集会

パウロ神学 其一

——ガラテヤ書——

1989年4月16日

小池辰雄

告白神学 パウロの回身 世界はひっくり返る 天愚 イエス・キリストの顕示 キリストに直結して 信行 隠されたる福音 我さえ我に別れぬるかな キリストの義を賜る エン・クリスト キリストの愛に圧倒されて 十字架と聖霊の不可離の関係

【ガラテヤ1】

1 人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、² 及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。³ 願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。⁴ 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。⁵ 願くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アアメン。……

¹⁰ 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕にあらず。

¹¹ 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。¹² 我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に由れるなり。……

¹⁶ 御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、¹⁷ 我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。……

【ガラテヤ2】

¹⁶ 人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。……

¹⁹ 我は神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。²⁰ 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生



き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。21我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり。

【ガラテヤ3】

11律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。……

26汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。27凡そバプテスマに由りてキリストに合いし汝らは、キリストを衣たるなり。28今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。……

【ガラテヤ4】

6斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。……

【ガラテヤ5】

1キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。……

6キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。……

22然れど御霊の果は愛・喜悦・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・23柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。24キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。……

【ガラテヤ6】

3人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。……

14然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。15それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。……

17今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。：

●告白神学

使徒行伝がこないだの集会で終わりましたので、何をしようかと思つたんですが、パウロの具体的な伝道をずっと見てきたわけですから、パウロの伝えたキリストの福音を、パウロの神学を、「パウロ神学 其一」として、しばらくパウロの伝えた福音の内容を学んでい



きたいと思います。

「神学」というと、無教会では

「神学は要らない」

と言う。反って信仰の妨げになるくらいに思うわけです。佐藤繁彦先生の――ルター研究の第一人者で、ルターのロマ書研究、バルトも書きましたが――「ロマ書の根本精神」という博士論文がある。私はそれを読みまして、

「いや、神学というのは素晴らしいものだ。これをいい加減にできないな」

と思った。その前に私はかなり哲学の本も読んでいましたが。それで、無教会にも神学がなくてはと思って、『無教会神学論』というのを書いた。『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻）の第二部のところにそれが出てます。

それで、無教会からまた嫌われた。聖霊の体験をして、御霊の事態が展開したら、それでまた除け者にされた。そういうわけで、独りになってしまった。この集会を始めた頃は、無教会とそう別れていなかったですが、だんだんそういうことになってしまった。ところが、キリストの直弟子の次元にだんだん入れられたら、いよいよこれが本当だということ、無教会や教会に何と言われようと一向差し支えないということ、展開した。そして、あなたの方のような同僚がだんだんできてきたというわけで、ご承知のとおりです。

パウロは別に、自分でいわゆる学問的な、一般の常識でいうところの「神学」「テオロギー」というものを、そういう本を書いたわけではない。パウロの書いたものは全部、手紙です。公の手紙で、その中に生の神学が、テオロギーではなくてテオロギッシェな、神学的なものがその中に渾然として含まれているわけです。それを学問的に神学に組織立てているのが、いわゆる神学者です。けれども、神学者の言うような、そういった神学はパウロは^{あす}与かり知らない。彼は啓示によっている。自分で考えたのではない。啓示によるものの神学的なるもの、それがパウロ神学です。

だから、これを「啓示神学」という。考えられたものではない。啓示された上からの福音の音信を、それをいわゆるお説教しているのでもない。告白している。告白神学だ。啓示神学の、こちら側から言うところ、それは告白神学というわけです。その内容を、これももちろんパウロは組織的に語っているのではないから、私も組織的にはやりたくない。組織的にすると、パウロの告白をむしろ抽象的にしてしまう。そういうわけで、パウロの書いた手紙をたどりながら、パウロの福音というものは――「神学」なんて言わなくていいんです、

「パウロが告白しているところの福音は」

でいい――それはどういうものかということ――詳しく言ったら、もう何回になるかわからん――あらまし、皆さんとたどってみたいと思うわけです。



●パウロの回身

まず、今日はガラテヤ書にぶつかってみたいと思う。これを逐一にやるわけではない。その重点をたどってみたい。

使徒行伝の次はロマ書、その次はコリント前後書、その次がガラテヤ書です。小アジアのガラテヤの人たちに与えた手紙です。最初にでているように、ガラテヤ書1章、

「人^{ひと}よりに^よ非^{あら}ず、人^{ひと}に^よ由^よるにも^も非^{あら}ず、イエス・キリスト及び^{これ}之^{これ}を死人^{うち}の中^{うち}

より^よ甦^{よみが}えらせ^{たま}給^{たま}いし父なる神に^よりて使徒となれるパウロ、

もうこの第一言が彼の存在的な本質をはつきり言っているし、福音の立場をはつきり言っている。誰か先輩から聞いたわけではない。キリストの直弟子たちもいたけれども、彼らから教わったわけではない。彼はギリキヤのタルソでギリシャ文化になじんでいるし、当時のギリシャ哲学をかなり学んではいるし、それからエルサレムに来ては、ガマリエルというパリサイ派の先生に師事した。ガマリエルから学んだものは、もちろん旧約の律法の世界です。福音ではない。だから、福音そのものは誰からも教わらない。しかも、キリストから教わったわけではない。キリストから教わったのではなくて、キリストに襲われた（笑）。

ダマスコ途上でいきなり天界から光がきて、復活のキリストに襲われた。ご承知のとおり、使徒行伝9章、22章、26章で三回告白しています。キリストを信ずる者、即ち福音を信ずる者を迫害していたんだからね。パリサイ人^{びと}で、ユダヤ教に忠実なるパウロですから。

「新しい新興宗教はけしからん」

と。彼は感情的ではない。パウロはなかなか頭も優れていますから。福音が律法に比べるといかにこれが外れたものかと、確信をもって迫害していたわけだ。それだから、とっ捕まえて牢屋に入れたり、死ぬのをよしとした。殉道のステパノがその第一人者です。パウロはステパノを石で撃つたのを見ながら、それをそれでよしとした。パウロはいきりたっていた。

「彼らは知らず。聖霊に逆らっている。しかし、赦してやってください」

と、ステパノは自分を迫害する者のために祈って天界へ往ってしまった。この事態はパウロを打った。パウロの意識の奥にこれは刺さったですね。

それで、キリストからいきなりやつつけられて、三日間、目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えず。アナニヤに按手されて、

「わが目より鱗^{うろこ}の如きもの落ちたり」

と、聖霊のバプテスマを受けた。アラビヤに行って祈った。十字架がはつきりしてきた。こういうわけです。

「人^{ひと}よりに^よ非^{あら}ず、人^{ひと}に^よ由^よるにも^も非^{あら}ず、イエス・キリスト

復活のイエス・キリストです。」



及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、

「キリストとキリストを復活させた神さまから使いとなって、使徒となった私パウロ」

と自己紹介した。凄い自己紹介です。だから、完全に啓示です。啓示も、なまやさしい啓示ではない。ひっくり返されて、やつつけられた。

今のユダヤ人は、

「あのパウロは間違っていた。ペテロはいいけれども、パウロはダメだ」

というような調子が多いらしいよ、ユダヤ教の連中は今でも。ペテロは、エルサレム中心の、キリストの直弟子たちの福音の世界には律法の部分もかなりまだ残存していた。だから、パウロとペテロは言い合いたこともあるわけです。ペテロもヨハネも、福音がもちろん中心になっていて、ペテロ書簡なんかを読むと、律法の世界はなくなってしまうていますけれども。

●世界はひっくり返る

2 及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。3 願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。4 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。

コリント前書の10章をちよつと見るかな、あちらこちらを引用しないと。11節に、

「11彼らがある此等のことは鑑となれり、かつ末の世に遭える我らの訓戒のために録されたり。」(コリント前10・11)

ここに、「末の世」とある。世は末であるというわけです。キリストもそのつもりでいらつしやった。

「もう世界はひっくり返つて、新天新地がもうじき来る」

と。福音は末の世に、

「もうこれで地上はお終いだ」

という迫りの世でもって語られた音信です。危機的なんです。

今こそまた末の世になった、この20世紀は。私はある科学者に聞いたんだけど、「空中のオゾン層がだんだんおかしくなつて、気候がこうやつておかしくなつていくのもみんなその影響からきている。この秩序を回復するには、10年でおかしくなったものを回復するのに100年かかる。このままでいくと、21世紀のうちに地球上のものはみんな死んでしまう」

と言う。21世紀の半ばころに。戦争どころじゃない。危機的な現実に正直なっている。こ



の世の終りに今度は現実に近いいてきている。我々はこの美しい地球をそのように害してしまった。ゲートが憂いたことが本当に起きてきた。

「自然を勝手に人間が利用していたら、今度は本当に困るときが来るぞ」と、彼はエッカーマンに言っている。

「自然を尊重し、自然と親しまなくてはいいかん。自然の法則に従っていかなくてはいいかん。人間が勝手に利用していたら、逆にやつつけられるぞ。困るときが来るぞ」

と。さすがに自然を本当に愛したゲートの言葉です。彼は「神」というものが融合していた魂だからね。

そういう現実に来ているので、人類は本当に救いがたいわけです。それでまあ、片一方では核兵器を造っている。核兵器の始末のしようがないんだ、これまた。原子力の利用も、これも自然を破壊している面がおおいにある。だからもう、キリストの生命を本当に生命していかないとダメです。

「それでも、私たちは決して死にませんよ」

という世界に本当に入っていないと。そのことを本当に伝えていかないと。私たちが「福音音する」ということは、本当に生命賭けの仕事になってきたんです。ただアクセサリ的な信仰ではない。

私は夜、自分で黙って祈っているときには、預言者たちや使徒たちを相手にしている。もう、地上にいないんです、私は祈るときに。天界に入ってしまったている心地でいる。そういう、

「預言者や使徒たちの信仰の現実を我々十二召団の人たちは行くのである」

という、この自覚を持たなかつたら、もう召団からどんどん逃げて行つていいよ。この頃、幾人か逃げて行つたが、結構でございます。出ていくやつは出ていけ。烈々たるものが私の中にあります。いろんなことに出つくわせば、逆に私は強くされています。さきほど、原始力の歌をうたつてくださったが、正に、キリストという原始力がある。

●天愚

昨日、イスラエルに行く青年がお母さんと一緒に訪ねてきた。原始福音のひとつです。一緒に祈って按手してあげた。あの方々はみんな、

「お父さまー」

と言って祈っている。それはそれでいいでしょう。キリストは、

「天にまします我らの父よと祈れ」

と仰つた。キリストは、「お父さま」と祈つた。これはキリストにとっては自然なことだ。私にとって自然なのは「主さま」なんだ。全存在的に、

「主さまー」



と一言祈れば、主の中に自分に入る。

「先生のお祈りの秘訣はどういうところにあるんですか？」

と聞かれたから、

「私は、『主さま！』の一言だ。叫ぼうが、沈黙の叫びであろうが、全身で『主さま！』

と言うと、私はキリストの中に全身を投げ入れている。もうひとつ別な言い方をすると、キリストに圧倒されている。その他は何でもない。十字架に掛かってまでも私を贖いとってくださいました主さまに無条件に入っていく。こっちがどうだこうだと、そんなことはありません」

と答えた。

「^{おきな}幼児の如くならずば」

とキリストが言われた。これが童心なんです。天童なんです。あるいは、天愚だね、私は今初めて言う。天狗さんじゃないよ。天の愚かさ。パウロも言った、

「福音の愚かさをもって」

と。良寛や親鸞の気持だ。もう、天下の馬鹿ものです、私は。

復活のキリストはお魚を食べた。誰も信じない。私はそのまま受けとる。キリストはお魚を食べられた。

「私は幽霊ではないぞ」

と。これは宗教的な物語ではないですよ。そういう私は馬鹿ものですから、聖書の。聖書はまだ伝え得ないで困っている。それだけの凄い現実です。ここに花があるよりももっと素晴らしい現実です。根源現実と相対現実が私にはだんだん一つになってきたんです。使徒たちが、

「我を見よ！」

と言ったその世界が。

いいですか。もう、滅びの21世紀が迫って来ているからね、滅びの21世紀が、世の末が。地球を滅びに向かつて行かせたものがこの人類の罪なんです。神に背いた罪なんです。キリストを受けとらなかった罪なんです。山上の大告白の中に、

「思い煩うな」

とある。

「空の鳥を見よ、野の草を見よ。そのように自然であれ」

と。文明文化は、人間の頭で行き過ぎた。自然を破壊した。それが深刻な現実にだんだんなってきた。

私たちは地上にありながら、天国人として歩いていなければダメなんです。どうなったっていいよ。乱暴な言い方をしますが、神の国は必ず来る。新天新地は必ず来る。希望の新天新地を地上でもって展開していったのは誰ですか。キリストではないですか。



福音書のキリストが地上で。これが私がこないだから書いている、

「35―53」（53分の35）

です。イザヤ書53章（十字架道）と35章（パラダイス、聖霊）です。

こないだ、

「イスラエルの学者のお別れ会があるから、先生、来ませんか」

と言うから、出かけて行つた。そのときに私は一席話した。

「旧約聖書でイザヤ書は本当の中心だ。全聖書をイザヤ書は持っている。黙示録まで持っている」

と。それで、このイザヤ書53章と35章もはつきり言つてやつた。

「我々自身が53章となり35章となつて、身をもつて証していく十字架道（53章）である。それから、身辺にパラダイス（35章）を展開していく。いかなる問題もこれで勝つていく。パウロはそのようにして生きた。彼の伝道はそのような、『キリストに在りて生き動きまた在るなり』という世界を進んで行つた。人間的な相対的な善悪、そんな世界ではないぞ」

と。

●イエス・キリストの顕示

4 主は我らの父なる神の御意に随みこころしたがいて、我らを今の悪あしき世より救い出さん
とて、己が身おのを我らの罪のために与えたまえり。5 願ねがくは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アアメン。

パウロは手紙を書きながら、告白し、讃美している。手紙はいわゆる手紙でない。全く告白です。最大の告白はパウロの手紙です。もちろん、アウグスティヌス以上です。

「神さまを喜ばせろ、人を喜ばせてご機嫌をとつているようなことだったら、キリストの僕ではないぞ」

と。1章10節。

10 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕しもべにあらじ。

しかし、パウロは決して気違いではないですよ。非常に思い遣りがあります。とにかく、あるゆる要素を彼は渾然と持っている。驚くべき人物だ。平面的に見ると矛盾だらけの男だが、矛盾ではない。もの凄い構造なんです。そのあとにも書いてある。

11 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由よれるものにあらず。

12 我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙もくし示に由れるなり。



1節と同じように11節でもういつぺん言っている。この「黙示」という訳は、本当は「レベレーション」、「アポカリユプシス」という字ですから、「顕示」、露に顕されたという、
「イエス・キリストの顕示によったもの」ということです。16節、

16 御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、¹⁷我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。
曠野に出かけて行つて、そして祈つた。ユダヤ人が

「メシヤはまだ来てない」

と言うが、しかし、どっこいパウロは、

「この十字架に架かった、復活なさったイエスこそ本当のメシヤである、キリストである」

と。彼は新しい所に伝道に行くと、必ずそのシナゴグ——ユダヤ人の集会所、キリスト教の教会——に出かけて行つては、この福音を語つて行つた。そして、シナゴグを「キルヘ」「教会」に、「主に属するもの」に変える。自分が変えられたように、それをやつていくわけですね。

さすがは、ガマリエルというパウロのユダヤ教の先生は偉い。使徒行伝5章34節、

「³⁴然るにパリサイ人にて凡ての民に尊ばるる教法学者

ユダヤ教の律法学者です、

ガマリエルと云うものの、議会の中に立ち、命じて使徒たちを暫く外に出さしめ、議員らに向かいて言う、

パウロが伝道していたからね、

³⁵『イスラエルの人よ、汝らが人々に為さんとする事につきて心せよ。³⁶前に

チウダ起こりて、

これは悪いやつだ、偽預言者だ。

自ら大なりと称し、之に付随う者の数、おおよそ四百人なりしが、彼は殺され、従える者はみな散らされて跡無きに至れり。³⁷そののち戸籍登録のときガリラヤのユダ起こりて多くの民を誘い、おのれに従わしめしが、彼も亡び従える者もことごとく散らされたり。³⁸然れば今なんじらに言う、この人々より離れて、その為すに任せよ。

パウロやペテロのするままにまかせよと。

もしその企画その所作、人より出でたらんには自ら壊れん。³⁹もし神より出でたらんには彼らを壊ること能わず、恐らくは汝ら神に敵する者とならん。』

(使徒行伝5・34〜39)



偉いね、このガマリエルという先生は。

「もう少し見ていろ。神さまから出ているなら、こつちがやつつけられるぞ。人から出ているなら、彼らは滅びていく。神に敵する者となったら大変だぞ」

と。ユダヤ教の限界を知っているんだ、このガマリエルというのは。パウロは正に、

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

と、キリストからやってきた。

●キリストに直結して

今度の『エン・クリスト』誌38号（1989年4月春季号）も大事な号だ。13頁のところに西千恵男君の「師と弟子」という文章が載っている。

「……その時、師が辿つて来た道を体得するまでは、弟子となる資格を得ないことも悟った。各召団の代表者もそれぞれの体験の仕方での狭き門を通つて立たされている。「聖書は大ドラマだ」。パウロの書簡にある如く、東京召団もドラマの連続だ。本物であればあるだけ、聖書の現実に似てくる。使徒的なキリスト直結の弟子たちもいれば、ユダ的ならずとも出ていった人たちも少なくない。人格を尊重する先生は決して恨んだりしていない。たとい裏切られても、執り成しの祈りをしておられる。先生は深い愛の人だ、涙の人だ。我々はじかにキリストを求めて集会につらなっている。集会の兄弟姉妹や小池先生も二義的なもののはずだ。先生を通して魂が真のキリストに直結された以上、各自聖書を祈読し、深く祈り込み、ますますキリストと一如にされて互いに助け、互いにゆるし、キリストの体らしくあらねばならない。このような在り方を怠り、責任を先生に転化して何になる。」

非常にはつきりとよく書いてくれました。我々はみんな二義的です。皆さんがキリストに一義的に直結するために私は集会している。私はその媒介者なんだ。何も法王ではないよ。私が信仰の告白をしていることが媒介。私はキリストに直結して告白しているんだから。この「二義的」という言葉に躓かないでくださいよ。

そして、あなた方は、私がキリストに直結してものを言っているから、あなた方はキリストに直結して聞いていればいい。

「なるほど、先生は直結しているな。私も直結して聞きますよ」

と。毎日、直結して生きてください。躓いても転んでもいいよ、何だって、そんなことはその時に、

「主さまー」

と叫んでください。直ちにキリストの中に自分を投げ入れてください。あるいは、キリストに圧倒されてください。

もう簡単なんだ、私は。この頃はもう簡単になつてしまつてね、言うことはないんだよ。



「また、先生は同じことを言っているな。同じことを言っている。」「2+2=4」ということばかり言っている」

なんて。言いながら私はしょっちゅうその中に入っている。あなた方も聞きながら、その中に入っていく。

「先生は同じことを言っているな」

なんて言うのは、本当に聞いてないんだ。

「そうです！」

と言って聞いてないと。ご飯も、朝ご飯を食べたら、お昼ご飯はいらないんですか。またお昼になったら、ご飯がいるではないですか。繰り返して食べているではないですか。無意識に空気を吸っているではないですか。人間の生命というのはみんなそうなんです。

とにかく、聖書は食らって、生命にしてくださいね。教えるではないですから。「キリスト教」なんて、「教」ではない。キリストそのものです。

● 信行

パウロの――「神学」という言葉は躓きになるから、使わなくてもいいけれども――パウロの持っているところの福音の神学的な構造というものは、正に生き生きとした霊的なものです。決して組織ではない。だから、私は「組織神学会」から出てしまった。神さまの真理が組織でなんか表せるか。ドラマティッシュな劇的な、ジスマティッシュではなくてオルガーニッシュな有機体的なものだということです。

ガラテヤ書というのは、パウロがせっかく福音を伝えたのに、またユダヤ教に戻る連中がいるから何だと言って、いきりたつて彼がこのガラテヤ書を書いたんです。またなぜ戻るかと言って。ペテロと論争したことが2章11節から書いてある。それはどうでもいいですが。それで、大事なのは2章16節、

16 人の義とせらるるは律法おきての行為おこないに由らず、唯ただキリスト・イエスを信ずる信

仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。

これはよく、無教会でもこここのところを引用する句なんです。それで、

「信仰のみ、信仰のみ」

とやっている。ところが、この信仰が今度は観念になってしまっている。パウロは律法の行為をさんざんやった男なんです。律法を拳々服膺して、律法の行為のチャンピオンだった。神さまをそっちのけだ。律法の行為さえやっていれば、もうそれで義人だと思っていた。そして、新興宗教のキリストが現れたら、これを迫害していた。そんな律法の行為はダメなんだ。キリストに在つての行為は、これは「行為」なんていつて特に取り扱うことはない。いつも私が申し上げているとおりです。

ここに



「信仰によつてのみ」

と、「信仰、信仰」と書いてあるけれども。これは「信行」、信じ行く方です。キリストの中に信じ、己を投げ入れて行く。これは実は、律法の行為よりかもっと凄い行為なんです。全存在的に自分を投げ入れて行くんですから。「信ずる」というのは、心理的にサイコロジカルに信じているのではないですよ。

「信ずるというのは、全存在をキリストにぶちまけていく、投げ入れていく」

ということですよ。だから、存在的な、全存在的な行動なんです、この「信行^{しんこう}」というのは。だから、「行」の字を使う。こんな書き方をするのは他にいない。もう伝統的に「仰」という字ばかり書く。そうでないんだ。信、即、行の世界である。

特別に「行為」なんて言わなくていい。そのことはマルチン・ルターも『ロマ書の序文』で言っている。

「信仰とは何と素晴らしいものか。善き行いをするのしないのなんて、そんなことは言わない前にもう既に善き行いはしてしまっている」

というような言い方をしている。それだけ、

「本当の信仰というものは信行^{しんこう}、一如の世界だ」

と。そういう「一如」なんていう言い方を彼はしませんけれども。

「信仰のみ」と、パウロもルターも言った。それが一番烈しい行動をしている。だから、

「本当の信仰というのは、全存在的な行動的なものが信仰だ」

という。特に「信仰と行為」なんて分けて言うからおかしなことになる。何%が行為になったかなんて、そんなことは数える必要はない。破れていても、その破れにおけるところの行為そのものはもの凄く光っているんです。

だから、そういう自分がやってきたことを彼は告白しているわけだ。律法の行為では人は神さまの前に義とはされない。キリストは神を完全に信行^{しんこう}したひとなんだ。信じ行じていたひと、神の栄光を現していたひとなんだ。

信と行とは二段構えではない。二段構えは力にならない。パウロは、そういう

「信仰ばかりだ」

と言っていないながら、たとえば、コリント前書4章を見てください。ロマ書、コリント書、ガラテヤ書、この三つはその実存がよく表れている。まあ、大変な手紙だよな。コリント前書4章10節、

「¹⁰我等はキリストのために愚かなる者となり、汝等はキリストに在りて慧^{さとし}き者となれり。我らは弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑^{いや}し。

もう、どん底に自分を置いているわけです。

¹¹今の時にいたるまで我らは飢え、渴き、また裸となり、また打たれ、定ま^{すみか}れる住家なく、¹²手づから働きて勞し、罵^{のの}らるるときは祝し、責めらるると



きは忍び、¹³ 譏らるときは勧めをなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、^{よろず} 万の物の垢のごとく^{あか} 為^せられたり。」(コリント前4・10〜13)

そういう、

「我らはボロボロだ、乞食だ」

と言う。本当にパウロという人は、そういうように棄身で生きていた。そして、相手をとこまでも恨まず、祈って、逆に執り成している。これは本当にキリストの愛と生命が来ているから。こういう弱き人は、キリストに在って強いものだ。「弱虫」と言ったって、そういうことですよ。実は、無力が無限力になるわけです。もう「始末がわるい」です、パウロみたいな人は。西郷南洲が言ったけれども。まあ、キリストを除いて、パウロみたいな実存はちよつとないだろうね。本当にあらゆるものを担っているわけだ。最後は殉道の死をとげる。パウロもペテロも。

●隠されたる福音

ガラテヤ書2章19節、

¹⁹ 我は神に生きたために、^{おきて} 律法によりて律法に死にたり。

律法は自分を生かすものであると彼は思っていたところがそうではなかった。律法は本当はそうなんだ。律法を心から、律法を内側から本当に満たすならば、それは永遠の生命の世界なんだ。これをやったのはキリストです。律法を満たした。律法を破りながら満たしたんだ、キリストというひとは。外側は、律法を大いに破ったですよ、キリストは。けれども、律法のもう一つ奥の世界をちゃんと満たしていた。モーセの十誡よりもっと凄い世界をキリストは山上の垂訓の言葉でもって告白しておられた。これは、神さまを相手にして、それから来ているところの示し、言、光、生命、愛、義、それが存在を通してただ現れている。太陽の光を受けていれば、こうやって花が咲くのと同じようなぐあいに。これがイザヤ書35章です。イザヤ書35章を身をもって現していたのが福音書のキリストであります。

私たち自身がイザヤ書53章とイザヤ書35章にいいよされていくことが人生の本当の姿である。いいですか、あなた方はまだ若いんだからね。あなた方が85歳になったときは、もう見えないほどに光ってしまう。来年は伝道50年になるから、記念の大集会は秋に、十二召団を集めたいと思うているくらいです。それでもうそれこそお終い。夏の集会はないです、こないだちゃんと宣言したから。

そして、もう律法には死んだ。けれども、

「律法に死んだ」

というこの律法は本当は、隠されたる福音である。このことは誰も言わないね。私だけだよ、おそらく。



「律法の根本精神は隠されたる福音である」ということです。

「汝、殺すなかれ」ではない。

「お前は殺人はしない。私がお前の神さまだから、殺人なんかできっこないぞ」というのが、律法の根本精神です。それを取り損なつたんだ。

「殺すべからず」にしてしまった。

「殺すことはしない」

というのは、ヘブライ語の「ロー」という言葉は単純な否定の言葉なんだ。「アル」という言葉が「すべからず」という禁止の言葉だけれども。どうしてこういう訳にしまったんだらうね。今の訳はみんな「べからず」になっている。「べからず」ではない。

先生が生徒に「お前はよく勉強する」と——「せよ」ではないんだ——

「よく勉強する。だから、試験はしない」

と言う。水を割らずにその角度からはつきりものを言うと、本当に魂は動かされるんです。

「そうか、そんなに信じてくださるのか」

と。相手を疑っていたら、疑われるだけの話。けなしたら、けなされるだけの話。作用は反作用となってくる。私は、

「神を愛する」

なんて、無教会時代はさっぱりわからなかったね。

「神を愛する、キリストを愛すとは何だ？」

と。

「キリストの愛に圧倒されるから、キリストの中にしがみつかざるを得ない、祈り入らざるを得ない」

という、ざるを得ない世界に入れられてしまったわけです。人に何と思われようが一向に差し支えない世界に入ってしまったからね。

●我さえ我に別れぬるかな

ガラテヤ書2章20節、

20 我れキリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、大変な言葉だね。

「私はキリストと共に十字架されました。根源的には私はいない。無者であります」と。これは「無者」ということだよ。無き者。私は無き者ですと。

「二つ無き心を主に留め置き我さえ我に別れぬるかな」



という。二つ無き心をキリストの中にとどめおき、我さえ我にわかれぬるかなと。素晴らしい句だね。手島さんの讃美歌の中にある句です。

「自分さえ自分に別れて、自分なんてありませんよ」

と。キリストだけです。キリストも無者だからね。神さみだけです。

「お父さま、あなただけです」

と。そのキリストが「我さえ我に別れぬるかな」の「我無き我」を、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われるわけです。

「我を見し者はキリストを見し者なり」

と言い得る、あなた方一人一人は本当に。それだけキリストの中に自分を入れてしまうわけだ。

「破れ器そのものにキリストが現れているぞ」

という世界です。私はキリストによつて破れ切っています。また、キリストによつて砕け切っています。そのことを今度の『エン・クリスト』38号(1989/4春季号「八十五路の峠に立ちて」)に書いてある。

「私は罪びとの首である」^{かしら}

とはつきり言ったよ。

パウロが「我は罪びとの首」と言った。内村鑑三が「我は罪びとの首」と言った。三番目に、私は「我は罪びとの首」であると、はつきり書いた。しかし、「罪びとの首」になってくださったのはキリストであります。

そういう、徹底的に自己否定してかかっていると、そこにはもの凄いイザヤ書35章が展開してくるから、不思議なことだ。もうこんな豊かな世界はないんだ。楽しくてしょうがない。

20 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、^{とも}^{もはや}

とは、

「旧き^{ふる}我は生くるにあらず。新しき我が烈々としてキリストに在つて生きている」

というわけです。だから、

キリスト我が内にありて生き給うなり。

と。私の生きているのは、キリストの生命が生きている。旧き我は、

「ああ我は悩める人なるかな」

という。パウロはただ過去を言っているのではない。本来の我は「ああ我は悩める人なるかな」であるんだ、絶対矛盾の自己同一だ。

だから、この福音を受けると、西田哲学を読もうが、カントを読もうが、プラトンを読もうが、老子を読もうが、孔子を読もうが、全部ちゃんと見えてくるんです。一流の坊さ



んのものも。だから、私はそれを詩の上で告白せざるを得ない。本当なもの。キリストの光というものは凄いから。天界のゲーテさんも喜ぶだろう、

「やっぱり、そんな凄い世界だ」

と。

「キリストわが中に在りて生くるなり」

という。

「己自身への畏敬の念」

とゲーテが最後に言った。自分自身に対する畏敬の念と。神の相に即して造られた我々のその事態に畏敬の念を持つと言う。決してそれは傲慢でも自尊でもない。

「天上天下唯我独尊」

の「我」は梵我である、宇宙我である。宇宙我だけが尊いんだということです。

皆さん、そういうような世界にだんだん入ってください。私は水を割らずにものを言うておきますから。

今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

また別な言葉で言った。

「それを受けとることによって」

ということですが、「信ずる」と言ったって。神の子を——「救い主である」という事柄を信じているのではない——それを受けとることによって生きている。「信ずる」という言葉が躓きになる。信受、体受です。身体で受けとっている。全存在で受けとっている。それで生きておりますということですが。

なぜ、私は元気があるかという、そういう現実をいただいているから元気ならざるを得ない。老いぼれることはない。ボケることはない。だから、言葉で証しするのではない。存在そのもので福音を証していこうというわけです。

いわゆる「自分の信仰」なんて言っている無教会は、

「信仰のみ、信仰のみ」

と言って、自分の信仰を私していると、こういうカーブ（下向きの放物線）になってしまう。

「私は何ありません」

と言うと、逆にこういうカーブ（上向きの放物線）になってしまう。逆カーブに天界へ向かっていく。

「内なる人は日々に新たなり」

と、パウロが言ったとおりです。

これがパウロの「キリスト神秘」の世界です。ダイスマンも、シュヴァイツァーも、「パウロは本当のミステイカー、神秘家だ」



と言った。神秘主義という、あの「主義」という言葉は使わない方がいい。神秘主義者ではない。神秘家です。「主義」というと、ひとつのイデオロギーになってしまう。

●キリストの義を賜る

21 我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり。

何のためにキリストは死んだか。我々のために。まあ、これだけはつきりとパウロは言っているのに、ユダヤ人はあいかわらずわからないんだ、これが。困ったもんだ。頑なだね、なかなか。ここに、「義とせられる」ということがいろいろ書いてある。3章11節、

11 律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。

これはハバクク書の言葉です。

「信仰に在つて生きるのが義人だ」

ということですよ。「義人は」というのは、義人が主語ではない。信仰に在つて生きるのが義人である。「義人」は述語になるわけです、内容的に。キリストを受けとつて生きる「義人」というのは、義を賜っていることですよ。

「義とせられる」

という言葉が躓きになる。

「信仰義認」

という。キリストを信ずることにおいて義とせられる。「義とせられる」をみんな観念的に受けとっている。

「キリストの義を賜る」

ということですよ。パウロは「義とせられる」という律法的な言い方をしたんです、正直。けれども、内容は「義を賜る」でなければダメなんです。

その義の内容は、復活の生命、聖霊です。これは同時に愛なんです。「義」とは、神さまの御意を垂直に受けとつて、それを行っていくことが「義」です。そうすると、それは横に、隣人に向かって、その神さまの愛とか、生命とかがみんな――それはキリストですよ――キリストのそれがみんな人に伝わっていく。それが横の線で、これが愛の線です。縦の線は義の線です。義と愛とは、要するに十字架なんです。十字架が義と愛を表している。縦線と横線の構造が。布も縦糸と横糸がなければ、我々が着ているこの布も成り立たないでしょ。縦横一如の世界です。

だから、義という言葉がなにか固い言葉でなくて、非常にありがたい、太陽の光を直接に受けてくるようなもの、それが義の世界です。



●エン・クリスト

U君の円現塾の新しい案内書に、

「子どもは神の子、仏の子。それぞれが天才です。その場さえ与えられれば、その天分をおおらかに発揮します。円現塾を通して一人びとりが太陽の如く輝きだしてほしいものです」

とある。素晴らしい句だね、これは。太陽の如くという。

十字架と聖霊。聖霊が太陽の如く光り輝く。日本の国旗は太陽ではないですか。国旗を見ると、軍国主義だと思う。冗談じゃないよ。そういう考えはひっくり返さなければダメだ。召団の中にも、そういう考えで国旗をあまり好きでない方もいらつしやるようだけれども。過去は過去、本当の現実には現実としていく。世界最高の国旗ですよ、太陽は。ゲ―テは太陽が大好きだった。キリストは私たちの太陽で、太陽の光よりか素晴らしい光が全身を貫く。3章26節、

²⁶ 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。

みんな私たちは神の子だと。キリストを受けとることによって。ここにも「キリストに在りて」と書いてある。キリストの中にある。「エン・クリスト」です。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という言葉葉をパウロの書簡の中で数えたら、164回あったと、ダイスマンという人が数えた。それくらいパウロはキリストと一つになっていた。

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

と。これが「エン・クリスト」です。

我々の雑誌の、機関誌の表題が『エン・クリスト』です。これを単なるお題目にしたらダメですよ。まず表紙を見て、

「EN XPISTO」

というギリシャ語を見たら、そこで瞑想して、「エン・クリスト」の中に入らなくては。それから、この雑誌を開いてくださいよ。それくらいの気持で読む。

あなた方、生活の――朝から晩までとは言いませんよ――しかし、ある瞬間には本当にそのような現実に関心を入れなかつたら空しいですよ。そうしたら、どんなにへこたれている時でも、どんなに寂しく思つたつて、どんなに悲しく思つたつて、それはもうその世界にすぐ入れるから。

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

ということを実に受けとつていかなければ。

「キリストはわがパラダイスなり。我はキリストのパラダイスなり。それ故に――隣人に向かつて――貴方はパラダイスであります。私は貴方にパラダイスを展開してあげますよ」



と。そういう世界だ。地上がパラダイスです。21世紀がどうなったって、大丈夫だよ。しよつちゅうパラダイスでいてください。どうせみんな地上の生涯は、百歳かそこらでみんな向こう側にいくんだからね。だからさ、

「死んでも死なないものを受けとらないで何のための集会か、何のための福音か」

ということです。キリストのこの愛の中に入ったら、人間関係は全部よく展開していく。それがぬけたら、どんなに計ったってダメになつていきます。いいですか。受けとらない人は、受けとらないことで自分を自分で審いているだけの話なんだ。

²⁷凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣^ぎたるなり。

は本当は、

「およそキリストの中へとバプテスマされた汝らは、キリストを着たるなり」

と訳すべきです。キリストの中へとバプテスマされる。これはロマ書3章にも出てくる言葉です。

²⁸今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、

そんな区別は何もないと。

汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。

これもみんな「エン・クリスト」です。一体たり。「ヘイス・エステ」「一つである」と。

「キリストに在つてはみんな一つだよ」

と。いわゆる全体主義ではない。

聖書の言葉は「意味」ではないですよ、現実です。言葉において読みながらその現実に自分を入れていかなかったら、

「ああ、そういう意味ですか」

ではおしまいです。どうにもならない。意味なんか分かったって。

語学の勉強もそうなんだよ。読んで、そして字引をひっぱって意味が分かつて、お終いと言って捨てる人はいつまでたっても語学は上達しない。それを何回も読んで、日本語にしないで、英語やドイツ語を読みながらただちにその意味がグツときている。そこまで来なければ、本当に習得したことにはならない。それを私は学生に言っているのに、さっぱり実行しないんだ。

「私は英語のない日は一日もありません。英語を読まなかったら寝るわけにいきません」

と。そういうようにして、語学は毎日とにかくやっていると。ドイツ語でも英語でも。勉強の中に入らないんだ、語学というのは。

●キリストの愛に圧倒されて

4章6節、



6 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。

『お父さん』と、神さまに対して言えるのは、御霊が来ているからだ」と。「主さま」とか、「お父さん」とかね。ところが、仏教でいわせると、

「神さまのことを『父よ』なんて言つて、何か偶像的なものを思い浮かべているのは、キリスト教というはおかしいものだ。お伽話みたいだ」

と、そう言うんだよな。ところが、具体的な「父よ」という言い方をもって、霊的な存在と本当に一つになっているキリストは、この「父」という言葉がお伽話ではない。「父」という表現が素晴らしい霊的具體性の言葉だ。カトリックでは、「マリヤ」という「お母さん」がたくさんあるようだけれども。父、神、霊神、ということです。人格神であり、また霊神である。5章1節、

「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな。」

律法の奴隷になるなと。罪から、自我から、私たちを釈き放した。自由とは何かというと、この自我、我執から解き放されたのが本当の自由です。これは勝手気儘ではない。

自由自在という。「自在」という言葉もいい言葉だ。我執から取り外されて自由になったその魂は何をするかというと、隣人愛となる。隣り人を愛する。

「人を助けざるを得ない」

ということが「愛する」ということです。

「助けざるを得ない。キリストのところに導かざるを得ない」

それが自由の内容なんです。自由と愛とは相即している。自分で勝手に楽しいことをするのが自由ではない。人を愛して、人を助けることが、これが楽しい。これが一番楽しいことになる。嬉しいことになる。だから、人が福音を受けとつて魂が喜ぶのを見ることほど、私は嬉しいことはない。

パウロも言っているでしょ、5章6節で。

6 キリスト・イエスに在りては割礼を受けるも割礼を受けぬも益なく、洗礼を受けるも受けないも、そんなことはどうでもいいと。

ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

「愛に由りてはたらく信仰」と言うけれども、

「信仰が本ものなら、愛において働かざるを得ない」

ということなんです。信仰と愛とを別問題にとつて、この言葉を読んだらダメですよ。

「信仰があるけれども、なかなか愛に働きません」

なんてのは、本当は信仰はないんだ。

「本当の信仰は愛に働かざるを得ない」



ということです。ざるを得ないんですから。

信仰とは何ですか。神さまの、キリストの愛を受けとることではないですか。そうしたら、その愛が流れていく。

「ま、仕方がないから信じておきましょう」

なんて、そんなことではないんだ。圧倒されるから。キリストの十字架に、復活に、聖霊に。そういったようなキリストの愛に圧倒されて生きているから、文句なしに。あなた方、圧倒されないの？ えらいね。私は圧倒されて、ぶっ倒れている。

●十字架と聖霊の不可離の関係

5章22節、

22 然れど御霊の果は愛・喜悦・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・23 柔和・節制なり。

いろいろなものが自然に派生してくるというわけだ。

24 キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。

それでは、無欲の禁欲の世界の人であるかと。そういうことではないですよ。豊かな情がありますよ。

ここのところはさんざん御霊のことが出ているね。ずっと御霊のことが出ている。面白いことが書いてあるな、6章に。6章3節、

3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。

この「有ること無くして」とは、本当の有るということは、「キリストにおいて有る」ことが「有ること」なんです。

「キリストにおいて有るということが無くして、みずから有ると思つたら、それは欺いている。そんな在り方は本当の在り方ではないぞ」

と。逆に言うと、

「無者となれ。そうすると本当の有ることになるぞ」

ということです。キリストから賜りたる十字架の贖いによつて無者となる。6章14節、

14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。

之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。

「主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ」

という。世との関係は十字架による関係だと。贖いの救いのことです。世はそれを受けとらないから。

15 それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、

「ユダヤ教の割礼を受くるも受けぬも共に数うるに足らず」



と、こんなことを言うものだから、もうユダヤ教にパウロは嫌われるに決まっています。無教会が、

「洗礼を受けるも受けないも、そんなことは関係ないんだ」と言っているのと同じです。

ただ貴きは新に造らるる事なり。

新人となつてゐることだと。

17 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩^おびたるなり。

「イエスの印」というのは十字架です。十字架の印を——なにも首に十字架を掛けなくてもいいけれども——

「十字架の印を帯びている。十字架された者だ」

と。本当にパウロは聖霊でひっくり返されてから、これほどまでに十字架を受けとった。極悪人の象徴、罪びとの首^{かしら}だからね、十字架というのは。そして、人を完全に、罪なき者が我々の罪の代わりに贖った。

まあ、とにかくパウロの書簡は、あちらこちらを読むと本当にもう、何と言いますかね、凄い言葉で満ちています。いろいろここに書いてあるんだけど、もうどこかへ行ってしまったな。ガラテヤ書の大体の中心のことは、今言つたような節でもっておわかりになると思う。

そのようにして、

「いわゆる律法を外側から行つて、それでよしとすることではなくて、問題は神・キリストをそっちのけのけのそんなことではダメだ。どこまでも、イエス・キリストの贖いを本当に受けとつて行くこと」

もうちゃんと、十字架と聖霊のことは今のガラテヤ書にはつきりでている。

十字架と聖霊のこれほど密接な不可離の関係をガラテヤ書が既に言っているのに、なぜ、十字架・聖霊をはつきりと一般の牧師さんたちが言わないか。体験してないからです。無教会も、

「十字架、十字架」

と言つて、御霊のことは言わないんだ。それで私は除^のけ者にされた。そんな馬鹿なことがあるかというわけです。

